日本風土記山歌註解

濱田敦

明人侯繼高の撰に成る全浙兵制考の附錄に「日本風土記」と稱する五卷の書のあること、及びそれに多少の改刻を施し、書名も「日本考」と改め、しかも李言恭、郝杰二氏の「考梓」として單行再版されたことなどについては、既に私自身も舊稿に解題したこともあり[1]、又その後渡邊三男氏によつて「日本考」の本文が活字に移された際、詳說の附されたこともあるので、ここには更めて述べる必要はないと思う[2]。ところで本書の中でも、特に卷五に載せられた「山歌」と題する十二首の俗謠、及びそれにつづく琴譜、廻文詞は、從來も比較的採り上げられることの多かつたものであるが[3]、その解讀は必ずしも嚴密であつたと云うことは出來ず、多くの問題點が殘されていた樣である。私は本稿でこれを再び、國語史の資料としての正しい位置に据えると云う目的のもとに、讀み直してみたいと思うのである。

山歌

「山歌」の意味は、辭源に「榜人所歌、吳人多能之、卽古所謂水調也、宋王元之集有唱山歌詩、又湘山野錄載錢武肅還鄉見父老、揭吳喉唱山歌、儞輩見儂底歡喜云云、是山歌實起於五代矣」と云う說明のあるのに據るべきものと思われる。但しこの場合の「山」が、はたしてもと如何なる意味を持つものであるかは明らかでないが、新村博士は琵琶行の、「山

歌」を引いて、恐らく「鄙歌」の意であろうとされている。内容から見て日本風土記のものも、俗謠、殊に恐らく中國江浙地方の沿岸をあらしまわつたと云われる、倭寇八幡船の榜人などが口ずさんだ舟唄の類らしいことには間違いなさそうである。

日春清水寺

和廬發而密也哥氣搖密辭鐵落外密辭南挨路路尼乃路革兮谷多擬

（お日春都、清水寺は、水流るるに、鳴るかい琴に）

原本文には「釋音」「切意」として語釋、大意を掲げているが、ここでは煩を避けるため、すべて省略した。以下同じ。

一々の文字のよみ方に關しては、從來の諸家においてまず異說はないと云つてよいが、その歌意は必ずしも明らかとは云えない、「和廬(日)」は卷四の語彙の冒頭天文の部にも「月紫氣」と相對して掲げ、しかもそこでは假名「おひ」を添えているので、その樣によむべき語であることについては疑ないが、「おひさま」ならばともかく、この形はどうも異樣な感じである。ましてつぎに「春都」とつづいて一句を成しているとすれば、益〻熟さない、如何にも外つ國人の日本語と云うほかはない。なおこの樣な種類の語に接頭辭「お」を冠することは、現代語ならばむしろ日常茶飯のことに屬するけれども、中世末期頃においては、特に女房詞などと名づけられる言葉遣に限つて見られるものであつた。とすれば、この歌は、荒くれの舟人の口をついて出たものとしては不似合の樣に見える女性的な格調を持つものと云わねばならないのであるが、實は、だからこそむしろ、逆に倭寇の舟唄としてふさわしいものだとも云うことが出來るのである。同じことは次下のものについても云えるであろう。事實收載された山歌の中その大部分は女性の立場でよまれたものと云つてよいのである。「清水寺は水流るるに」は、想像するに、恐らく音羽の瀧の水の落ち流れる風景をよんだものと思われるが、末句の「乃路革兮谷多擬」はいささか解し難い。切意によれば、「水流滴响似琴聲」とあり、その水の流れる音が琴の聲に

似ているとの意らしいが、しかし「鳴るかい琴に（似？）」をその様な語として考えることは甚だ困難である。但し一字一字は、まずナルカイコトニと讀む以外に道はなさそうである。「擬」をニの音節を表わす爲に用いたのは、云わば表音表意兼用であり、この様な用い方は、特に本書において著しい。

若し「鳴るかい」とよみ、「い」を現代語におけると同じ終助詞と解するとすれば、その様なものの最も古い例の一つとなる筈であるが、當時の一般の例としては、少くとも京都の言語ではやはり「かや。」の形であり、ロドリゲスの大文典などにもこれのみをあげている。江戸初期に入ると、上方ではそれが「かえ。」の形でも現れる様になつたが、しかし、「かい」はまずそれだけでは用いられず、原則として「かいの。」或は「かいな。」の様に「の、な」を伴つて現れるのが普通であつた。とすればここにも疑問は殘されているのである。

夫歸妻接

一多濕那禿那耶和一多濕那禿那耶他賣里油米各打推（釋音「搖」）屋紺笥一單彈可尼

（いとほしの殿や、おいとしの殿や、賜まれ弓肩よ、靱頂かうに）

「一多濕」は「いとほし」「いとし」兩様によみ得る字面であり、やはり當時の俗謠をあつめた閑吟集などにも、例えば岩波文庫二八五の

いとしうもないもの、いとほしいとも云へどのう、あゝ笑止欲しや宜や、さらば和御寮ちといとほしいよのう

の様に、同じ歌の中に双方の形が併出している例さえ見える。但し日葡辭書は「いとほし」に當るべき Itôxij と云う長音形のみを掲げている。この様な場合の長音は、多分に强調的であると云つてよい。なお本資料における長音の表わし方は、必ずしも一様ではないけれども、この場合の様に特に長音を表わすべき手段を採らないことも屢〻である。「いとほし」は、釋音で「心肝」と註している様に、ここでは男女間の愛情の最高潮に達した際に發せられる、極めて感動的な氣持を

表現する語と見てよい（恰も古代語における「かなし」に當る）。但し日葡辭書では Itôxij とは別に Itavaxij の語をも掲げ、しかも双方全く同じ譯を施している（Pagés, "chose dont on a pitié ou compassion"）。この兩語の語形及び意味の變遷に關しては相當複雑な經緯がある樣であるが、ここでは詳述するいとまを持たない。

「他賣里」は「止まれ」と解する人もあるけれども、「他賣」の文字は卷四の語彙でもタマ（「玉」など）の音を表わすのに用いられて居り、やはり「賜ま（う）れ」もしくは「賜ばれ」とよむべきものであろう。但し果攝に屬する文字は、例えば「多、那、何、我、和、摩」など、いずれも、むしろ國語のオ段音節にあてられたものが多いのであるが、この「他」は例外的にア段の音節であるタを寫す文字として用いられている（現代呉語でも多く［t'a］、北京官話でも同樣。）「賜うれ」「賜ばれ」は云うまでもなく「賜うる」「賜ばる」の命令形で、前者は更に「賜はる」の形にまで溯ることが出來る。命令形に限つて更にタモレと云う短音形も生じた。いずれも現代語ならば「下さい」に當る云い方である。[4]

「一單彈可尼」は「頂かうに」とよみ、やはりオ段開長音を「可」一字で表わしていると見るべきものである。この場合濁音節「ダ」を「彈」で表わしているが、その前の音節タに鼻音の文字である「單」を用いているのは決して偶然ではない筈である。

一首の意、表面的には諸家の解される樣に、狩獵、或は戰場から歸つた夫を迎えた妻が、丁度現代のサラリーマンの奥さんが玄關で夫からカバンや帽子を受取る樣に、弓を受取りながら疲れた夫をいたわつている情景と一應見ることも出來ようが、しかし、實は、この歌の眞意はもつと官能的なもので、つまり「弓肩」は男の、「靫」は女の性器の象徴であり、男女の關係のクライマックスをうたつたものと見るべきであろう。中國語譯の「心肝」もやはりその樣な際に用いられる語として適當なものらしく、又舟唄などの俗謠には、むしろその樣な「卑猥」な內容のものが普通でさえあることからも、そう解釋するのが至當と思う。萬葉集東歌の「こまにしき紐ときさけて寢るが上にあどせろとかもあやに愛しき」と好對

照の歌と云えようか。

月夜私情

壽五搖那紫氣華搖一搖一枯木里挨界紫氣索夜搖禿那俄（釋音「木蛇」ここに入る）索搖那

（十五夜の月は、宵々曇れ、曉冴えよ、殿御戻さうよの）

「十五夜」は、現代語ではジュウゴヤであるが、この場合の字面「壽五搖」はどうしてもヨで、ヤとはよめない。「夜」は音ヤ訓ヨ（ル）で音相酷似し、混同される蓋然性が大である。從つて、當時はむしろジュウゴヨと云う形であつたかも知れない。この語日葡辭書不載。假名文獻でも、若し出て來るとすれば漢字で「十五夜」と書かれている筈で、どうよまれたかを知るべき手がかりはまずなさそうである。

「禿那俄」の下本文「木蛇」を脱しているが釋音によつて補うべきもの。但し「蛇」は國語のドの音節を表わすには不適當な文字と云うべきで、或は「跎」「陀」などの誤かも知れない（卷三卷首の「いろは」の「と」には「陀」があり、卷四の語彙にも「喉」を「那陀」と寫したものなどが見える）。

一首の意は明らかで、切意に「一更雲掩月、情人好來、沒人知覺、五更月明、情人好去」とあるに盡されている。

少女別郎

壽西之法之禿揑的發奈路路外坦蕩烏溪骨師那密辭薄乃立搖那

（十七八と、寢て離るるは、唯萍草の、水離れよの）

一々の文字のよみ方にはまず異說はないと云つてよい。「十七八」は當時の俗謠に多く見えているが、恐らく女として最も魅力的な盛りの年頃であつたらしく、二三の例をあげれば、

誰そよお輕忽、主あるを惜しむるは喰ひ付くは、よしやしやるゝとも、十七八の習ひよ〳〵、そと喰ひ付いて賜うれ

のう、齒形のあれば顯はるる（閑吟集、九一）

十七八ははや川のあゆそろ、よせてくせきよせてさぐらいなふ、お手でさぐらいなふ（室町時代小歌集、一四四）

十七八は棹に干いた細布、取り寄りやいとし、手繰りよりやいとし、糸より細い腰を締むれば、いたんとなほいとし（狂言小歌、岩波文庫六九）

など、いずれも甚だしく官能的な歌ばかりである。ところでこの歌、切意によれば「十八九歳女、纔相合就離、流萍無水養、怎得久在世」とあり、題の「少女別郎」とともに、女の立場からよまれた様に解しているけれども、それはむしろ逆であつて、やはり、これは男が女との別れの後の氣持をよんだものと考えるべきものであろう。

青春嘆世

壽西之法之外勿達單皮所六格革里氣尼法乃挨殺雞蘇路隔搖那

（十七八は、二度候（まろ）か、枯木に花が、咲き候かよの）

よみ方にはまず問題はないと思う。「勿」をフの音節にあてることはこの外にも多くの例があり（例えば卷四の語彙でも「勿子革（ツツカ）（二日）勿葉拂机（フエフキ）（吹手）勿密（フミ）（文）」など）、珍しくないが、この文字は元來微母に屬し、從つて當時の中國人の手に成つた日本語資料の原則では、バ、マ行の音節を寫すのに用いられる筈のものである。從つてこれをハ行音、即ち當時兩唇摩擦音〔Φ〕を子音としていたと考えられる音節にあてたのは、異例に屬するが、趙元任氏の現代吳語的研究（一〇二頁）によれば、この地方で「不」の意に用いられるこの文字は、大部分の地點において〔feq〕の音をもつて現れているらしく、その理由は明らかでないにしても、當時から既にその様な音であつたとすれば、これを國語のフにあてたことは決して無理とは云えないのである。

「しち（七）」は、現代京阪語では〔çitʃi〕と發音され、假名でもむしろ「ひち」「ヒチ」と書かれることが多い筈の語

であるが、この頃にはまだその様なことは一般に見られなかつた。これは恐らくハ行子音が兩唇摩擦音から、現代語の様な喉頭乃至硬口蓋摩擦音（[h, ç]）に變化した後のことと思われる。

この歌の意も極めて平明の様であるが、切意によれば「十七八時難算二次、好比枯木殘花、雲時又是一世」とあり、この様な解し方もあり得るものかと、むしろ驚かれるほどである。「十七八」はやはり上に述べた様に、女の最盛時であり、この時をはずしては二度もどつて來ないことを述べ、今の間に青春謳歌すべしとうたつたものであろう。但し「枯木に花が咲く」と云う表現は明らかに佛教思想から出たもので、やはりその裏には無常感があり、題の「青春嘆世」もその意味では必ずしも當らずとしない。

美女憶郎

搖那乃隔外紫氣尼木賴枯木法乃尼革熱和慕爾外界里和慕外業蘇

（世の中は、月に叢雲、花に風、思ふに別れ、思はゝに添ふ）

この歌に關しては、かつて別の機會に觸れたことがあつたが、[5] 從來末句のよみ方に誤りがあつた爲に、正しい解釋がなされていなかつた様に思われる。即ち「和慕外業蘇」は、一字一字について云えばそれぞれオ、モ、ワ、ネ（或はエ）ソ（或はス）に當てられるべき字母であるが、それでは意味が通じない。從つて、これを渡邊三男氏も指摘された様に、薄雪物語（上卷）の「思はぬに添ふ」の意としてよむ爲には『ね』は『ぬに』の縮約された訛音か、それとも原文に錯簡があるか」と考えざるを得ないことになる。これについての私の考えは次の通りである。

當時、打消の助動詞「ぬ」は、少くとも音聲的には、撥音化した形が話し言葉においては一般に用いられていた筈である。[6] この様な撥音に、やはり鼻子音ではじまる音節ナ、マ、行音が接する場合、撥音がそれに吸收されて、聞き落され易かつたのではないかと思う。特に、あまり日本語の知識のなかつたであろう外國人が、云わば聞き書きに記錄した様なこの

種の資料では、その様な撥音を寫さないことが稀ではない。例えば日本風土記卷四の語彙でも「箇逆之(今日)、一之末米(一錢)」などいずれも、その様な理由にもとづく表記法と考えてよいと思う。とすれば、この場合もやはり、「思はぬに添ふ」の「ぬ」が撥音の形をとつていた爲に、「に」に吸收されて聞き落され、從つてオモワニソ(オ)と云う五音節として寫されたのではないだろうか。「業」は云うまでもなくネ或はエに當てられるのが普通であるけれども、日本風土記と云わず、一般にこの種の資料では、國語のエ列音とイ列音とは、相互に共通の文字で寫されることが、むしろ普通であり(例えば「尼」もニ、ネ兩音節に共通して用いられている)從つて「業」もネではなしに、ニとよむことは、決してそれほど無理ではない。

雜唱小曲

紫氣宜梭法乃尼乞打路外道理革乃付魯那來心可搖那

(月にそ花に、來たるは道理かな、降るの來、盡期よの)

この歌も、從來のよみ方に相當重大な過誤があつた樣に思われる。「紫氣宜梭」の「梭」をはたしてソ、ゾいずれによむべきか、又その解釋如何は問題である。この資料では、後にもまとめて述べる筈であるが、國語の清濁音を略〻區別して寫していると見られるけれども、中には、その區別を表わすのに適當な文字の存しない場合、特にサ、ザ行音の區別に關してあいまいで、兩者を共通の文字で寫していることが少なくない。ソ、ゾもやはりその一つで、「梭」はソともゾともよみ得るのである。釋音によれば「宜梭」を合せて「明」と註して居り、從つて「月にそ」は「月明らかなり」の意と解せられているのである。とすればこれはむしろ清音ソとよみ「月に候」と考えるべきものであるかも知れない。「候」は當時キリシタンのローマ字綴で so と寫される形のものがあつたのである。しかし、釋音の解釋のあてにならないことは云うまでもなく、一首の意及び格調から云つても「月に候、花に來たるは道理かな……」では、どうも落ちつかないと私

は思う。と云つて、一般によまれている様に「月にぞ」と、係助詞「ぞ」によむことも、それよりはるかにすぐれたよみ方だとも云えないのであるが。

下の句「付魯那來心可搖那」は特に問題が多く、從來の諸説これを正しく解したものはなかつたと云つてよい。私の考えを述べる前に、この歌の類歌として、室町時代小歌集に

月をふんではよのつねそうよ（候）、風雨の來こそ（盡期）じんごよの

と云うのがあることをまず指摘しておかねばならない。一首の意は説明するまでもなく、平明であるが、特に上句に多少表現の異るものがあるにしても、全體として日本風土記の歌と全く同巧異曲と云うことが出來る。殊に下の句の「風雨の來こそじんごよの」はここと全く同じ文句と考えてよいのではないかと思う。本來は恐らく「風雨（フウウ）」だつたのであろう。しかしこの様な「漢語」は、あまり教養のなかつたと思われる、倭寇に從つた荒くれの舟人達には、耳遠いものであつたろうから、これを音相及び意味の類似した「降（フ）る」とすりかえて歌つたとしても、決して不思議ではなかつたと云えよう。釋音は正に「付（風）魯（雨）」であり、その意味だけは、正しい解釋を施しているのである。

「來」は「正音」と註されているので、勿論これは漢字本來の表意的用法によるもので、他の文字の様に、音を借りたものでないことは明らかである。しかし、それならば、今ここにこの文字を如何によむべきかと云うことになると、まず普通に訓讀して「き」とする以外にあり得ず、とすれば、歌全體の音調から云つて、やはり室町時代小歌集の様に、その下に「こそ」と云う二音節の助詞がほしいと云うことになるであろう。

最も問題になる「心可搖」は、釋音では「心誠」と註しており、これは上の「來」とは違つて「正音」卽ち表意的用法ではない筈であるのに、從來の諸家は何の疑いもなしに「訓讀」して「こころ」とよんでいたのである。しかし、私はやはりこれは、「正音」の註のない限り、すなおに、「音假名」としてシン或はジンとよむべきものと考える。尤もこの場合

も、他にその例が少くない様に、全く「心」の意味と無關係に選擇されたものではないであろう。云わば、これも表意、表音兼用の文字には違いないのである。「心可搖那」は從つて、當然ジンゴヨノ、卽ち「盡期よの」を寫したものであることまず動かないところであろう。上にも述べた様に、特にサ行音においては清濁の書きわけは屢〻曖昧であり、この場合も「心」はジンをも表わし得る。又、この様に鼻音の文字のある場合、下の「可」は、むしろ濁音ゴとしてよむのが適當であることが多いのである。

「盡期」はよんで字の如き意味の語であるが、⑦この當時屢〻「盡期の君」と熟して、「終世變らじと誓いあつた愛人」の意味として用いられ、更に進んでは、「盡期」だけで愛情の深さそのものを表わすこともあつたのである。やはり室町時代小歌集に

じんごの君は、來ぬもよい、會者は定離の、世の習

と云う歌も見える。この歌の意もあらためて說明するまでもないが、隆達節の

月の夜にさへ、來ぬ人を、なかなか待たじ、雨の夜に

などの、云わば裏返しと云うべきものであろう。

又

黃俺和慕以外燥公乞立拔少十賣打少十賣打少事

（我が思ひは草根、伐れば生じ、又生じ、又生ず）

この歌、よみ方に殆んど異說がない。略〻同じ歌が室町時代小歌集にも見える。卽ち

おもひは是草根、切れば又生じ、またしやうず

「燥公」はサウコンを寫したものであること問題はない。「公」の様な喉內鼻音の文字を、撥音を含む二音節にあてた例

は下の「洪密（オシミ）」もそうであるが、他にも珍しくない。例えば巻四にも「公俄（コンガウ）（女鞋）」「立空乃許多（リコンナヒト）（聰明人）」「木那那封（モノノホン）（書）」など。

又

密岩那埋止陽豚索所賴乃密外谷多摩洪密多和（釋音ここに「里」入る）賴外知搖和復魯理敵

（峯の松山、さぞら浪はこ（ゆ）とも、御身とお（れ）らは、千代を經るまで）

云うまでもなく、古今集東歌の「君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も起えなむ」を本歌とするもので、類歌は極めて多い。同じ時代の俗謠集でも、室町時代小歌集、隆達節、狂言小歌などに見えている。歌詞に小異があるけれども、隆達節の

末の松山、さざ浪は越すとも、御身と我とは、千代を經るまで

及び、狂言（相合袴）小歌の

末の松山、ささら浪は越すとも、御身と我とは、千代を經るまで

は本來同歌と認められるものである。日本風土記の「索所賴乃密」はどうしてもサソ（ゾ）ラナミとよまざるを得ない字面であるが、この形の語は他の文獻に見えない。日葡辭書などによれば、「波」に關してはこの語サザナミ或はサザラナミの二形があつたらしく、隆達節、狂言小歌のものも正にそれ以外ではない。第二音節、より古い時期はいざ知らず、當時は明らかに濁音であつたと思う。[8]

「谷多摩」は釋音の方の本文「谷多摩打」につくり「不來」と註している。しかし、この「打」は渡邊氏も云われる様に、むしろ小書して「打不來」とつづけるべきものの様に思われる（この様に釋音の部分において大字小字の表記の混亂しているものは決して稀ではないのである）。ところで「谷多摩」を「打不來」の様に打消の意にとることは「ず」に當る

音節を表わすべき文字のない爲に、困難であるが、上にあげた隆達節、狂言小歌などの本文は、このところ「こすとも」となつていることから考えると、或は「越すとも」と云う肯定形を、誤つて「越えずとも」と云う打消としてよみ傳えたのではないかとも想像される。しかし「谷多摩」をこのままでコエズトモとよむことは無理であり、まだしもコユトモの方が無難ではないかと思う。即ちこの様な位置における音節ユが、屢〻曖昧に發音され、從つて聞き落される可能性は十分あると考えられるからである。なお、「こゆ」と「こす」とは、多少意味、用法に差異はあるにしても、to go over に當る動詞であると云う點では共通であり、從つてこの場合いずれによむことも出來る。なお「摩」の様な果攝に屬する文字は、いずれかと云えば、國語のオ列音を寫すのに用いられることが多く、その點から云つても、ここを岩波文庫の様にコトマタとよむことは無理だと思う。

「洪」はやはり喉内鼻音の文字を撥音に當てたもので、ここを岩波文庫に「君（きん）」とよませているのは全く不當である。この文字は匣母に屬し、我が國の漢字音でも、漢音系統の音ではたしかにカ、ガ行の音節を、頭音として持つものであるが、呉音の一部及び唐音ではア、ワ行音として現れるのが原則と云える。現代呉語では一般に頭子音〔fi〕（〔h〕の有聲音）、稀にはゼロ即ち母音の形を持つて現れていると云われる）。從つて、恐らくその地方の方音の體系にもとづいて寫された（或は少くともそれが多分に混入した不純な官話の體系の上に立つ）と思われる本書においては、この種の文字は、原則として國語のア、ヤ、ワ行音に當てられているのである。

「和（里）賴」も岩波文庫「我等（われら）」とよんでいるのは無理で、果攝の「和」はやはりオとよむべきもの。「おれら」は現代人の語感からすれば如何にも現代語的な、しかも卑語的な感じを與えるかも知れないけれども、案外この語は古くから、しかも相當高い階層においても用いられていたことは、更めて指摘するまでもないであろう。（女性の用いた例も見える）但しそれが用いられる話し相手は、話し手よりも多少低い關係に立つものであつたかも知れない。

末句の「理」本文、釋音ともにこの文字であるが、前後の文脈から見て、當然「埋」と改めらるべきものであろう。

夜憶故交

過宿那箇搖兮外何多多禿捏打箇獨世那箇搖兮外黃俺密獨捏打南尼那只挨下老和多搖里黃俺密外和一多濕那

（去年の今宵は、おとと寢た、今年の今宵は、我が身と寢た、何の違いやらう、おとより我が身は、おいとしの）

「何多多」は、釋音によれば「女名」とあるが、これは、前後の文脈からして、當然下の「和多搖里」の「和多」と同じ人間をさすものと考えなければならない。とすれば、前者の「多」一つを衍とするか、或は後者が「多」を一つ落したか、いずれかであろうが、音節數から見て、むしろ前者を「おとと寢た」とする方が都合のよいことはたしかである。

「黃俺（密）」はやはり釋音によれば「我（身）」とあるが、如何であろうか。當時「わが」が一人稱だけでなく、二人稱にも用いられたことは、本書の卷四の語彙にも「爾」に「黃俺」と註していることからも明らかで（そこでは「我」には「和里」をあてている）、Pagès にも

Waga, Je, moi. ‖ (Quelque fois, moins proprement), Tu. ‖ Waganono. Chose mienne, ou tienne.

と解しているのである。從つて、この場合も、むしろ「我が身」は上の「御身」即ち「おまえ」と同じ意に解した方がよいのではないかとも思う。

「只挨下老」は釋音「因何忘記」とあり、岩波文庫頭註には「此の字にて『思案やら』と訓ずべし。又は『とがやら』の誤か」とあり、渡邊氏も「とがやら」とよんでいるけれども、この字面をその樣によむことは甚だ無理である。「只」はアフリカータを頭子音とする照母の文字であり、從つて、タ行音でも、チ、ツの音節ならばとにかく、トの如き音節を寫したとは考えられないのである。本書では他に例がないけれども、華夷譯語には「只（地）」「答只（刀）」など、いずれもチに當てたと見られる例があり、この場合もやはり、そうよむのが最も妥當ではないかと思う。又「挨」は屢〻

用いられる文章であるが、母音音節ア及びガにあてられており、この場合もそのいずれかによむべきものと思う。「下」はこの資料では多くヤを寫すのに用いられているけれども、稀には「下姑小（ヒヤクシヤウ）（百姓）」の様にヒヤと云う音節にあてられた例もある。この文字もやはり匣母に屬するもので、本書の一般原則から云えばヤに當てられたものが正規の用法と云うべきものであり、ヒヤを寫したと見られる上例などは、むしろ官話、卽ち共通語の要素と見るべきものであろう。なお本書の寫音に用いられた中國音の問題については後にまとめて述べる筈である。

右に述べた一々の文字の本書における用法からすれば、「只挨下老」はチガ（イ）ヤラ（ウ）とよみ「違ひやら（う）」の意とするのが、前後の文脈から見ても、最も穩當ではないかと私は思う。この場合第三音節イは上のコユトモのユと同じ様に、それが母音音節であることと、それが立つ位置と云う、特殊な條件の爲に、聞き落されたと見ることも可能であるが、或は又、〔ai〕と云う母音重複が〔ɛ:〕の様な形に融合して現れたものを「挨」が表わしていると見る事も可能であろう。

現代語でも用いられる「やら」は、この當時既に文獻に見えているけれども、一方まだ、より古い形である「やらん」乃至「やらう」も併存していた。[19] とすればこの場合「老」の文字はむしろ「やらう」を表わしているものと見る方が適當であるかも知れない。

一首の意は、特に「わがみ」を一人稱とするか、二人稱と考えるかによつて大きく違つて來るが、切意では「去年今夜與和多多同睡、今年今夜我自睡、因何忘記和多同睡、自呼我身大心肝」と解している。卽ち丁度古今集の「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」の歌と同じ様な情景で、獨り寢の、恐らくは、男が、さびしさをかこちつつ、別れた女を想つている歌と云うことになる。しかし若し「わがみ」を二人稱とするならば、「おと（と）」は、それとは別の相手（の女）となり、この男は昨年は「おと（と）」、今年は又別の女である「わがみ」と寢、その女に對して、「おまえの方がおと（と）よりいとしい」と云つていることになる。はたして歌としていずれが妥當であろうか。

祝延聖壽

吉密外知搖慢世知搖慢世禿搖路可庇和以外兮謳打那挨里革答那禿計搖客乃

（君は千代ませ、千代ませと、喜びを祝ひ、歌の有難の、時世かな）

「慢世」は釋音「萬歳」と誤解しているが、勿論「坐せ」の意であろう。諸家これを多く「まし。」とよんでいるが、「世」はたしかに、シの音節にあてられることを原則とする文字であるけれども、上にも述べた樣に、この種の資料では、國語のイ、エ列音が屢〻共通の文字で表わされることがあり、例えば「石」なども、この資料でやはりシ、セ兩音節にあてられているところからしても、「世」はむしろここではセとよむ方が適當であろう。この場合特に「世」の文字が用いられたのは、多分にその意味をも勘考された爲で、やはり音訓兼用の文字と云うべきものである。そして、殊にその樣な場合には音の上では多少の無理を冒してまで、好字を用いようとする傾向が見られるのである。

「喜びを祝ひ歌の有難の時世かな」と云うあたり、いささかつづき具合がよくない。岩波文庫及び渡邊三男氏いずれも「歌の」の下に讀點を打つているけれども、はたして如何に解釋されたのであろうか。切意では「君主千年萬歳、千年萬歳、恭喜大宴、歌唱有期、太平時世」と譯している。なおこの當時の「有難」と云う形容詞は、まだ多分に原義的な用法を殘しており[10]、この場合も云わば「千載一遇の期で、今をおいては謳歌する時は再び來ない」の意と考えられる。

女嘆配遲

一多豚和枯里和白枯里外卸迭革活浮尼搖那子那烏之革結的一子埋疊

（暇をくれうば、くれはせで、川舟よの、綱打ち掛けて、何時まで）

「枯里和白」はクレ（リ）オバとよむべき文字であるが、當時推量の助動詞「う」が動詞に接するとき、オ段の長音の形に發音されていた爲この樣な寫し方がなされたものである。なおこの場合の樣に、推量の助動詞から條件を表わす接續

助詞「ば」につづいた例も、丁度この當時の文獻に屢〻見られるもので、狂言記にも「ござりませうば謠はしやれませい」「御下りなされて下されうば。忝う御座りましよ」などの例が見えている。[11] この場合は「暇をくれればよいのに、くれもしないで」と云つた程の意味で、云わば希求願望の意に近い氣持と考えられる。

一首の意、題の「女嘆配遲」から考えると、女が緣遠きを嘆いた歌らしいけれども、內容は、必ずしもその様には見られない。卽ち、「暇をくれればよいのに、くれはしないで、川舟の様に、綱をうちかけ、つないだままで、いつまでおいておかれることやら」とでも譯すべきもので、むしろ男とのくされ緣が切れないで嘆いてでもいる歌の様に私には感じられるのである。

琴譜、憶中華調

可意濕安那乃隔法乃兮可意那乃隔國尼許多木那立空拿搖乞而之木那氣搖兮義西一潔搖革挈尼氣搖陽脉阿和密辭挨私步饒士密路明哥多兮箇箇路和慕兮木曹烏彌多委禿木路革搖那渾着路逆封屋之

この歌については既に吉町義雄氏の解讀があつて、[12] それに詳しいので、ここでは、特に問題になる點に限つて私の考えを補うに止めたいと思う。吉町氏の解讀文は左の通りである。

（戀しやの、中華に、戀の中國、人物利根なよ、着ちる物淨い、西湖好か景、青山綠水、遊ぶ上手、見る見事い、心想無慙、海遠い、とものかよの、おんぢやろ、日本中）

この歌は、題の「憶中華調」からもわかる様に、云わば中國人の「じやがたら文」とでも云うべきもので、恐らくは長崎あたりに來ていた中國人、しかも日本の地に住みついて、故鄕の中國に再び歸るめあてもまずない様な人が、望鄕の念に堪えずしてよんだものと云うことに一應なるであろう。しかし、實は、私の考えるところでは、それは單なる見せかけであり、現在でも、例えば漫才などで、日本人が、アメリカ人の舌足らずの日本語の口眞似をして人を笑わせることがあ

る様に、これも、中國人の口眞似をして、日本人が作つた、多分に作爲的な「お涙頂戴」式の歌ではないかと思う。

冒頭の「可意濕安」は何故か小字割註の形になつている。下の「而之」「禿木路革搖」も同様であるが、この形式がはたして何を意味するものか明らかではない。意味からすれば、別に割註にする必要のないものなのである。「安」はむしろアとよみ「戀し、あの中華に」とすべきではないかと思う。

「なかはな」「なかくに」「ひともの」「にしいけ」「きよやま」「あをみづ」など、いずれも「中華」「中國」「人物」「西湖」「清山」「綠水」の直譯語乃至「似而非」片言であり、この様な語が當時一般に行われていたものとは必ずしも考え難い。但し長崎あたりでは、或は面白半分に中國人の口眞似的に流行していたのかも知れない。「中華に」の「に」に當るところ、本文では「兮」であるが、釋音では「尼」となつており、これは吉町氏の云われる様に、下の「義西一潔搖革挈尼」と入れ換つたものであろう。

「而之」は釋音では「之而」の順序（やはり双記）になつており、吉町氏はそれによつて「著ちる物」とされた。しかし「而之」でも「著るちもの」とよみ「著物（きもの）」の聞き誤り乃至方言音と考えることは出來ないかとも思う。「挨私步饒士」は渡邊氏「遊ぶによし」かとも云われるが、「饒」の文字の用法から云つてもやはりジャウとよむべきものであろう。即ち卷四の語彙にも「天癸（月經の意）」を「勿饒（不淨の意）」と註した例が見られる。「遊ぶ上手」もやはり「似而非」片言的表現の一つであろう。

「木曹」は渡邊氏「心思もぞ」とよんでいるが、これはやはり吉町氏に從つて「無慙（むざん）」とすべきであろう。日葡辭書には muzo, muzan 兩形を出して、双方共略ˣ同じ譯を施している（Pagés Mouzo, Parole par laquelle on témoigne avoir pitié et compassion de quelqu'un）現代語でも東北及び九州地方の方言に「むぞい」「むぞか」の形が、「かわいそう」或は「かわいい」の意で用いられている事は周知の事實である。

「禿木路革搖」は釋音「路」を「那」に作り、いささか問題の存する語句であるが、「路」と「那」とはこの種の資料では國語のラ行音及びナ行音を表わすのに通じて用いられる可能性のある文字なので、どちらでも、ル、ロ、ヌ、ノを通じて表わし得ると思う。私は前後の文脈から云つてトムルカヨとよみ「海の遠いことが、私の故郷中華に歸ることを止めているのであろうか」と云うなげきを表わしたものと考えたい。

次の「那」の文字、上につづけて「止むるかよの」とも出來るであろうが、やはり新村博士に從つて下につづけ、「なうおちやろ」とよむ方がよさそうである。切意にも「不在我日本國裡」とある。卽ち「日本の中には、あの故郷の西湖の様な好い景色のところは無いでございましよう」と云う意であろう。

「逆封」の様に、わざわざ入聲の文字をここに置いたのは、やはりニホンではなく、ニッポン、乃至ニッホンと云う促音の入つた形を表わしているのであろう。當時のキリシタンのローマ字表記では、大體、Nifon, Niffon, Nippon と云う三通りの形が見られるが、これは、いずれかと云えば、第二の Niffon に當るべきものではないだろうか。

又、廻文詞

乃革氣搖那多多和那捏木里那密乃密索密乃密那里木捏那和多那搖氣革乃

（長き夜の、ととをの睡りの、皆眼醒め、浪乘り船の、音のよきかな）

あらためて説明するまでもなく、最近までその習慣の殘つていた初夢の寶船の繪に添えられる歌であるが、この歌がいつ頃つくられ、又いつ頃から初夢、寶船とむすびつけられることになつたのか、更には、この歌の意味するところについても、多くの疑問が殘されているのである。作者については、この種の歌の多くがそうである様に附會された傳説的なものは別として、不明とするほかはないであろう。時代についても、勿論はつきりしたことはわからないけれども、文獻に見える最も古いものも、室町時代以前には溯れない様に思われる。この日本風土記のものなども、恐らくはその様な古い

例の一つに數えられるであろう。

「廻文」と云う特殊な形式にはめこむ爲に、やはり或る程度の無理が冒されている事は事實であろう。殊に上の句、「長き夜のとをの睡りの皆眼醒め」と云うあたり、意味はいささか明瞭を缺いている。「とを」は日本風土記の本文「ととを」とよむべき字面になつており、釋音では「十八」と譯しているが、切意では「十人共舟、夜長困倦、浪裡舟行、各皆醒看」とあり、釋音の「八」は「人」の誤りらしい。それにしても「十の睡り」と云うのは、奇怪な表現と云うほかはない。

「睡り」には「捏木里」、「浪乘り船」には「乃密那里木捏」をあてているが、古代語のバ、マ行音の音價及びその對立關係については、現代語と少し異る點があつたのではないかと思われる。詳細については舊稿にも述べたことがあるので、それに讓りたいと思うが、[19] 結論だけを述べれば、中世末期以前のバ行子音は、現代語と違つて［ᵐᵇ］の樣な音價を持つていたらしく、從つて、現代語に比べて、更に一層マ行音と交替し易かつた筈である。但し、バ、マ行音の間に一應の音韻的對立の存したことは事實であるが、中には、双方の形を持つ二重語が併存する場合も少くなく、その中のあるものは現代語にまで引つがれているのである（例えばサブイ―サムイ、サビシイ、―サミシイなど）。このネブリ―ネムリもやはりその樣なものの一つであつたらしく、日葡辭書などにも Neburi, Nemuri 兩形を掲げているのである（但し、後者の方をより正しい形だとことわつている。しかし假名ではむしろ當時は「ねふり」と書かれたものの方が多いのではないかと思う）。

要するに、バ、マ行音は、原則として音韻論的に區別を持つものであつたけれども、或る場合には、その區別があいまいで、云わばどちらに發音されてもかまわない、云い換えれば、その區別が、意味の區別に積極的にあずからないと云うことが、現代語よりも屢〻見られたのではないかと思う。今の場合の「睡り」「浪乘り船」なども恐らくその樣な例であり、發音は恐らく「木」で表わされる樣なものとして聞えたのであろう。

最後に、この日本風土記巻五の山歌などに用いられた音譯漢字の表を掲げ、そこに見られる音譯の一般的傾向、及びそれによつて窺われる當時の國語の音韻乃至音聲的事實の注意すべき事柄について、簡單に述べておきたいと思う。

ア	挨、安、阿	イ	分、一、以、意、委	ウ	屋、烏、謳	エ	夜	オ（オン）	和、何、渾、洪	カ（カウ）	革、各、界、格、隔、客、可	キ	氣、溪、雞、乞、吉、計	ク	枯、骨、國	ケ	結、潔、挈	コ（コン）	哥、谷、過、箇、可、公、空	ガ	南（挨）、挨、黄、俺、革	ギ		グ		ゲ		ゴ	五、俄、心（可明哥）
サ（サウ）	索、蔀、殺、索、燥	シ（シャウ）	濕、西、世、少	ス	私	セ	世、卸	ソ（ソウ）	所、蘇、蘇	ザ（ザウ）	曹	ジ（ジャウ）（ジン）	十壽、饒心	ズ	事、士	ゼ	熱	ゾ	梭、所、宿	タ	他、打、單、坦、達、答	チ	之、知、只	ツ	繒、紫、止、子	テ	的	ト（トオ）	多、禿、獨、多、多（和）
ダ（ダウ）	單（彈、坦）蕩、道	ヂ（ヂャ）	渾（著）	ヅ	辭	デ	疊鐵、敵、迭、	ド	蛇？	ナ	南、乃、奈、那、拿	ニ（ニツ）	尼、擬、爾、宜、義、業？、逆	ヌ		ネ	捏、岩、尼	ノ	那	ハ	發、法	ヒ	虛、許	フ	勿、付、復	ヘ		ホ（ホン）	封

バ	薄、拔、白	ビ	單皮、庇	ブ	浮、木、步	ベ	
マ	賣、埋、脉、慢	ミ	密、米、明、彌	ム	木	メ	密
ヤ	也、耶、陽、下			ユ	油		
ラ ラウ	落、賴 老	リ	里、理、立	ル	而、路、魯	レ レウ	里、立 里和
ワ	外、華、黃、活						

ボ	箔
モ モウ	木、摩 熹
ヨ	搖
ロ	六、路

まず、母音音節ア、ヤ、ワ行音について問題となるのはエ及びォであるが、從來も機會ある毎に述べた樣に、少くとも中國人や朝鮮人の手に成つた資料からは、この問題の解決のかぎはつかめないと云つてよい。と云うのは、勿論、中國語自體において、はつきりと〔e〕と〔je〕、〔o〕と〔wo〕とを區別して表わすことの出來る文字、從つて又音韻の體系を持つていたと云うことが殆んで考えられないからである。從つて、日本風土記の場合、エにあてている「夜」更にはケ、セ、テ……等、エ段の音節にあてられている文字の多くが、〔je〕或は〔ie〕の樣な韻のものであるにしても、それが直ちに、當時の、この資料によつて寫された國語のエ……が、すべてその樣に發音されていたと云うことにはなり得ないのである。同じことはォについても云えるであろう。ォにあてられた「和、何」「渾、洪」などが、いずれも喉音匣母の文字であることは、たしかに注意すべきものと思われるけれども、しかしそれが國語の〔o〕〔wo〕いずれを寫したものかは、そう簡單にはきめられないのである。

ガ、ザ、ダ、バ行の「濁音節」の表記法は、一概には云えないけれども、略〻區別された文字によつて表わされている

と考えてよい。勿論中には、例えばソとゾとの様に、殆んど區別のないかの様に見えるものもないではないが。この事實は、裏返せば、同時に寫した中國語音韻史の側の問題でもあり得る。ここに用いられた中國音が、はたしてどの地方の方音の體系にもとづくものかは、そう簡單には云えないけれども、かつて觸れたこともあつた様に、すべてが江浙地方の「呉語」によるとは云えないにしても、少くともその要素の混入は明らかに認められると思う。私の想像では、やはり官話、即ち共通語的なものの基盤の上に、恐らくは記錄者自身の方言と思われる呉語の要素が自ら混入して來たものではないかと思う。とすれば、この國語の清濁を比較的はつきり書きわけていると云うことも、やはりその一つの現れと見てよいかも知れない。

なお、濁音を表わすべき文字の前に、鼻音の文字を用いることはこの資料でも時々見られるけれども、かつて指摘した海東諸國紀などにおけるほど一般的ではない[14]（右の表中濁音の項で「黄俺、單彈」などと表わしたものがそれである）。しかも、特にサ行音に關しては、この様な表わし方をしたものは一つもないのである。又、鼻音の種類と濁音のそれとの對應は、やはり海東諸國紀のものほど嚴重ではなく、特に舌内と唇内との區別は、この資料における中國音では既に存在しなかつた筈であるので、これを使いわけることはあり得ない。しかし、「黄俺、明哥」や、「單彈、坦蕩」の様な例のあることからすれば、全くそれと無關係に選ばれたとも云えない様な氣がするのである。

サ行子音が〔s〕〔ʃ〕のいずれであつたかを決定する事も、やはりこの種の資料では無理であろう。從つて「世、卸」などが、はたして云われる様に國語の〔ʃe〕を表わしているかどうかは決し難い。これに對して、タ行音のチ、ツが、既に破擦音を子音とする〔tʃi〕〔tsu〕に變化していたものを表わしているらしいことは、「之、知、只」及び「繒、紫、止、子」の様な、いずれもアフリカータ系の文字をこれにあてている事によつて、略〻推定出來ると思う。同じことは、濁音節ヂ、ヅについても、その例は少いけれども、云える筈である。ヂャにあてている「渾著」の「著」がやはり知母、

卽ち破擦音を子音とする文字である事は問題はないが、ヅの「辭」に關しては、それが邪母に屬するものである爲に、むしろ摩擦音〔ʒ〕を表わしているのではないかとの疑いも挿さまれるかも知れない。しかし、趙元任氏の現代呉語的研究によれば、むしろ殆んどすべての地方において、〔dz〕〔z〕兩形の併存が見られる樣で、上海などの樣にこれを一樣に〔z〕としているところはむしろ少數であると云つてよいらしい。とすれば、この「辭」も、或は、むしろ國語の〔dzu〕を表わしているのかも知れないのである。

ハ行音の寫し方は、ヘに關してはその例がここでは見當らないけれども、ハ、フ、ホの三音節に對しては脣音系統の文字のみを用いているのに對して、ヒには、「虛、許」と云う、喉音曉母の文字のみをあてると云う對照的な現象が見られる。それがはたして國語におけるヒと他の音節との子音の差異に對應すべきものかどうかは問題であるけれども、他の同じ樣な資料との對比及び、ハ行子音の〔ɸ〕から〔h〕への變化において、母音の如何と云う條件による遲速の可能性から考えて、私はやはりヒにおいて比較的變化の早かつたことを示すものと解釋して差支えないのではないかと思う。

促、撥、長音の表わし方については、その實例が極めて少いので、はつきりしたことは云えないけれども、促音とその前の音節を併せて「逆」と云う入聲の文字で表わしたのは、卷四の語彙における同種の例などを考え合せて、決して偶然とは云えない。これに對して、撥音の方は、勿論、それと先行する音節を併せて、鼻音の文字で表わすのが原則であるが、しかもその場合の鼻音が、ここでは、「洪、公、空、封」の樣に殆んどすべて喉內のものであり、舌內、脣內のものが極めて稀であることは甚だしく奇異の感を與えるけれども、これは、卷四の語彙におけるものを考え合せるとき、むしろ、單なる偶然であり、國語の撥音の音聲的特徵を示したものとは必ずしも云えない樣に思う。[16]

特に長音に關しては、はたしてそれが長音を寫したものか、そうではなくて、むしろ國語において短音形のものがあつて、それを寫したのか、はつきりしない場合が多いけれども、「可、索、曹」の樣な、一字で、長音を含む二音節を表わ

したと見られるものと、「多和、里和」の様に特にォにあてられるべき文字を添えて、「割つて」寫したものとの二種類にわけられるであろう。これは、或はかつて述べた様に、自然な發音と丁寧な發音との差を示したものかも知れないし、或は又、特に「十」（トオ）などは、當時の國語においても一般に割つて發音されたことによるものかも知れないのである。

註

(1) 拙稿「國語を記載せる明代支那文獻」國語國文　昭和一五、七。

(2) 渡邊三男氏「譯註日本考」昭和一八　大東出版社。

(3) 例えば、新村出博士「倭寇時代の俗謠」（續南蠻廣記所收）、西村眞次氏「こぼれ松葉」（安藤教授還曆祝賀記念論文集所收）、藤田德太郎氏校註、岩波文庫「閑吟集」附錄「室町小歌拾遺集」。

(4) Pagés, は Tamawarou, Tamôrou, Tabarou の三形を掲げている。但し Tamawarou をより正しい云い方と註している。

(5) 拙稿「語末の促音」國語國文　昭和三〇、一。

(6) 但しキリシタンが原則として nu の形のみを採つているところから見れば、撥音形は、少くとも標準的な云い方ではなかつたかも知れない。話し手の發音の意圖から云つてもまだ /nu/ が目ざされており、それが時に無自覺的に [n]（は [ŋ]など）の形で實現されることがあつた程度なのかとも想像される。

(7) Pagés には Jingo. Terme, ou fin. とある。

(8) Pagés. Sazaranami, Sazanami の二形をあげる。但し Sazareichi, Sazaremizzou.

(9) Pagés は Yaran, Yara 二形をあげ、前者には「文語」の註を加えている。なおロドリゲスの大文典によれば、Yarɔ の形は肥前、肥後、筑後地方で用いられた方言形らしいが、土井忠生博士も「近古の國語」で引用されている様に覺一本別本平家物語に「多いやらう少いやらうをば知候はず」の様な例が見えるので、一時期前には、この形も、京都語で行われていたものかとも思われる。

(10) Pagés には Arigatai, Chose sainte et digne de vénération ‖ Chose rare et difficile à acquérir. とあり、この當時既に現代語的な意味に轉換しかけていたらしい。

(11) この「うば」については土井博士の「近古の國語」（八八頁）にも記述が見える。それによればこの云い方は、肥前地方の方言であるとのことがロドリゲス小文典に見えると云う。

(12) 吉町義雄氏「九州の方言」（國語科學講座）、「九州方言の特異性（二）」九大國文學、昭和六、一一。

(13) 拙稿「撥音と濁音との相關性の問題」國語國文　昭和二七、四。

(14) 拙稿「海東諸國紀に記錄された日本の地名等について」人文研究　昭和二九、四。

(15) 撥音の音價の變遷に關して、最近、唐音資料などによる奥村三雄氏の說がある。例えば「日本漢字音の體系」（「訓點語と訓點資料」第六輯）。

（昭和三一、五、二六稿）